

余剰から「不足の時代」へ エネルギーと食糧の農産物争奪

環境経済学の第一人者レスター・ブラウン氏は食糧とエネルギー原料との競合の問題を 2006/6/17 発行の週刊東洋経済で次のように述べています。

【石油に代わるエネルギー原料】

現在、石油高騰の影響で代替エネルギーのとうもろこし、サトウキビといった農産物を原料として生産されるバイオ燃料「エタノール」に注目が集まっています。この流れの中で、米農務省は来年、年間 5500 万トンのとうもろこしをエタノールの原料にすると5月に発表しました。この 5500 万トンという数字は世界最大のとうもろこし輸出国である米国のとうもろこし輸出総量に相当します。一方、日本は年間 4000 万～5000 万トンを輸入する世界最大のとうもろこし輸入国です。

【食糧とエネルギー原料の競合】

商品はより価値の高い方に流れていくことから、原油価格が高騰すると今まで食糧として流通していたとうもろこしやサトウキビの価格が代替エネルギー生産のためのエタノールの原料の価格と競合するようになります。言い換えれば、スーパーマーケットとガソリンスタンドが同じ商品をめぐり競争状態に陥っている状態です。これは過去にまったく見られなかったことで、世界の多くの人々はまだ認識していません。しかし、世界の自動車保有者 8 億人と、所得の半分を食糧に振り向けなければならない 20 億人の貧しい人々が農産物の争奪戦を繰り広げる現実を放置できるものではありません。

【風力発電で走るハイブリッド車と穀物食の推奨】

こういった対立構造に対する回避策に対してブラウン氏は風力発電で走るハイブリッド車の利用促進と穀物食の推奨の2点を挙げています。

特に穀物食に関して、日本はコメの自給率がほぼ 100%ですが、穀物輸入比率は 72%(04 年度の飼料用を含む穀物全体の輸入率)もあります。73 年にアメリカで起きた大豆の輸出禁止が再来したら大変なことになるので、穀物もコメも絶対に自給率を下げるべきではなく、特にコメに関しては輸入に反対すべき。

しかし、最後に氏は、この四半世紀の中で環境問題の数少ないサクセスストーリーとして オゾンホール縮小を挙げ、環境問題は複雑化しているが、人間が努力しようとするれば、改善に向けて動き出す好例としてオゾンホールの縮小は大きな意味を持つと指摘しています。

上記のオゾンのように食糧の問題を解決する為に、私たちに簡単にできることはまず、食生活を変えることではないでしょうか。肉食を減らし、穀物を中心とする素食をすすめていくことが必要なのではないでしょうか。

穀物を中心とする食生活に変更し、日本で栽培できる穀物の消費を増やすことにより、コメだけでなく日本全体の食糧自給率を上げることが必要と考えています。

RI では、穀物の消費を増やし食糧自給率を上げる為に素食生活を提案し、産地に対しても、減反で空いた土地に雑穀を栽培してもらうことを進めています。